



昭和42年(1967年)

6月号 (No. 264)

 社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

新ルーム関係

- 新ルームへの期待……松方三郎… 1
 ルーム基金募金について …… 2
 新ルームの概要……松田雄一… 2
 基金募集について …… 3
 随想 記憶と想像……武田久吉… 3
 トランシーバーの使い方 芳野越夫… 4

海外登山

- エルブルーズ (早稲田大学) …… 4
 日米合同アラスカ登山隊 …… 5
 Yerupaja初登の疑問 …… 吉沢一郎… 6
 主な海外登山 (1967) …… 7
 今年のペルー・アンデス …… 松田… 16
 諸情報 春季懇親晩餐会 …… 山崎安治… 7
 学生山岳連盟結成につき …… 8
 マ氏、ブ氏、レ氏歓迎会・ネパール
 大使の声明 …… 9
 図書紹介 生と死の間 (松田) 他 …… 10
 谷川岳遭難防止条例の施行 …… 12
 会務報告 …… 13
 一水会懇親会設置趣意書
 …… 8・16・18

新ルームへの期待

松方三郎

よいルームを持ちたい。この希望は、ほとんど日本山岳会の歴史と同じくらいに古い希望だ。

初期の何年かの間は、横浜の高野さんの住いがその役割を果たしていた。以来次から次に、誰かの家がこのルーム代りをしてきたが、本格的にルームらしいルームを持ったのは、一九三〇年のことだった。「山日記」出版を思い切ったのは、一つにはその家賃を稼ぎ出すという意味もあった。この虎の門のルームを獲得したことは、確かに日本山岳会の歴史の上に特筆されるに値する事件であり、一大飛躍だった。

たとき、われわれは歓声を挙げてこの再発足を祝った。お茶の水時代は十余年続いた。しかし地主さんの体協が代々木に移ってしまつたので、われわれも撤収の余儀なきに至った。

日本山岳会はいよいよこれで路頭に迷うのかと心配していた矢先に現われたのが、今の神宮前のルームだった。いやも応もない、有難いと思つて引越したのだ。だが、これについては、随分会員、会友各方面のご厄介になり好意をうけた。だが何としても地下室なので、書物その他の保管には支障があり、早晚ほかに移らねばならない運命にあった。

神田の新しいルームに移る決心をしたのは、以上のような事情によるのだが、何はともあれわが山岳会も、これで地上に這い出るこ

向のあるのは、最近の著しい傾向だ。その証拠に外国の山岳会の雑誌などには、地下探検の記事がときどき出る。しかし会は一年中地下室に居るわけにいかない。この際一躍して五階の楼に登ろうというのである。今度は図書室も談話室も、小さいながら四、五十人の集會室もできる。

アルパインクラブなみの高望みをしない限り、いろいろ多角的に会のルームとして活用されることは間違いない。会の事務もこれで一段とはかどること確かだ。

しかし、先立つものは、いつの世の中でもお鳥目である。幸い当面のところは、引越

できるだけの資金ぐりはつくそう。だがいざれば大いに会員諸兄の喜捨を仰がねばならない。この件は項を改めてそれぞれお願いするが、どうか諸兄のご協力をお願いする。



集會お知らせ欄

この欄は、毎月の集會開催をお知らせする欄です。今までは、各種集會については、その都度案内状をもってお知らせしていましたが、これからは特殊の事情があるときを除いて、すべてこの欄でお知らせいたします。

ご承知のように、七月からは、装い新たなルームの集會室が使用できる筈ですから、これを機会に、一つでも多くの集會を開催したいと思っております。講演会、研究会、報告会、懇親会等、集會はバラエティに富んだものにすべく、これらを企画、立案して円滑に行なうため、いま集會委員会を作っております。この稿が皆様の目に触れる頃には、集會委員会も実際に活動を始めますので、次号には、具体的に集會をお知らせすることができるようになります。

今まで、東京支部で行なつておりました、三水会もこれからは小集會の一環として行ないます。各地方支部で開催する現地小集會についても、この欄でお知らせいたします。

集會は、普段あまり顔を合わせない機会が少ない会員諸氏にとって、は絶対の機会でもあるわけです。また、このような集會があったらと思われる方々は、どんなアイデアを集會委員会へお寄せ下さい。

毎月の会報が、お手許に届きましたら、先ずこの欄に目をおおして下さい。そして出来るだけ多くの方々に参加して頂きたいと思ひます。(担当理事 関口周也)

会員各位

ルーム基金募金について

拝啓、陽春の候益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて本会ルームをお茶の水から現在地に移転してから既に二年余になりますが、現ルームは交通上も構造上も必ずしも適格とは云い難くあくまでも仮のものとして、この間新ルーム確保に意を注いできたのであります。

申すまでもなくクラブにとってルームは会員交流の場としてクラブライフに欠かせないものであり、この故にこそあらゆる面から快適なルームを確保することが要請されるのであります。特に昨今の如く海外からの来訪者も多く又会員数の増大、各種集会の活発化の現状からして伝統ある本会に相応しいルームの確保と整備は急務となっております。

ルーム確保にあたっては本会独自の建物を持ち、加えて山岳図書館等の諸施設を併設し得ることが最も望ましく、会員すべての年来の夢であります。しかしながら本会の現状からすればその実現には相当の年月を必要とするのであります。

ここにおいて次善策として、とりあえず現在地よりの移転と内容的改善を目途に実現してきたのであります。今回は、今回はからずとも神田錦町河岸にある向井ビル五階が有利な条件で借用し得ることとなり、理事会においても種々検討の結果ここにルームを移転することが会員サービスの見地からも望ましいと判断したのであります。場所的には交通上も可成り便利になる上、広さも現在のほぼ三倍となるため、利用上も充実化を期待でき、この移転は是非とも実現したいと考えるものであります。

しかしながら本会財政の現状からして資金的に直ちに借用権利金、改装費等概算八百万円を支出し得る蓄積を有しておりません。一方都心部にこのような著しく有利な条件を以って借用し得るビルがこの機会を逃しては二度とは有り得ないと思うのであります。

社団法人 日本山岳会

会長 松方三郎

ルーム基金募金委員会

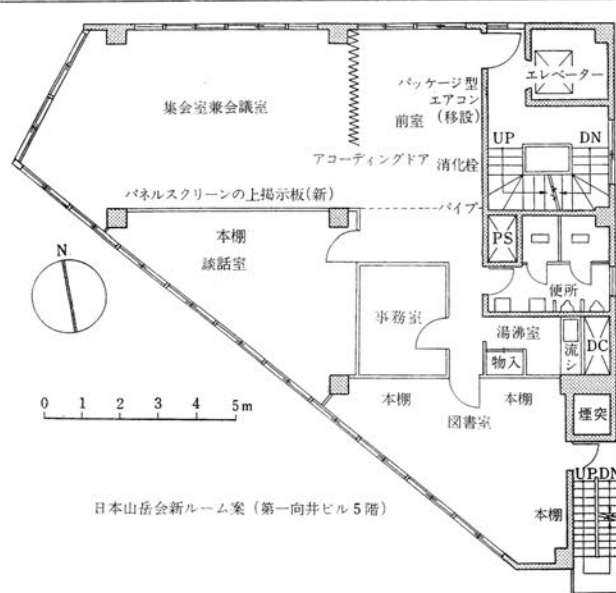
委員長 松方三郎

☆新ルームの概要☆

此の度移転する予定の新ルームが、都心部の交通の便利な場所にあることは一頁の略図でも判るとおり、高速道路をへだて、気象庁とパレスサイド・ビルとの間に皇居の緑が眺められる環境にあります。

新ルームの建物第一向井ビルは五年前前に建設された建物のため、外観は多少汚れてはありますが、入居予定の五階の部屋は、ビルの所有主の向井組が会議室として利用していたのみで、殆んど新築当時のままであり、本会のルームとして使用するためには、内部を改装すれば、素晴らしいルームになります。

そこで四月の理事会で選ばれたルーム改装委員会では、深田委員長以下、



日本山岳会新ルーム案（第一向井ビル5階）

- 小林義正、牧野衛、佐藤久一朗、松田雄一、飯野亨、関口周也の各委員により、四月十五日午後、向井ビルを視察し、竹中工務店山岳部中川氏の協力を得て左記配置図の様な基本的改装案がまとまりました。即ちこの案によれば約四十坪のスペースを、(A)集会兼会議室、(B)会員談話室、(C)図書室の三室に分け、それらの三室をつなぐ扇の要の位置に事務室のスペースを考えております。
- (A)集会兼会議室
集会室として使用するには折たたみ椅子にて約八十名を収容でき、映写スクリーン、プロジェクター、暗幕等完備し昼間でも映写可能になる様にと考えております。会議室として使用する場合にはアコーディオン扉でし切ることにより、落ついた会議室にする事ができます。勿論、外国入登山家の歓迎用として、この部屋は、大形ルーム・クーラーが入っており、居住性は良好と思います。
- 以上のべてきたことを総合すると、素晴らしいルームの様子を想像できることと思えます。しかし乍ら、これは目標とする募金額が集ってからの話で、会員各位の御協力なくしては、困難であります。何卒宜しく願ひ申上げの次第であります。
- 尚新ルームのための絵画・装飾品、記念品の御寄贈も歓迎致しますのでお申出頂けますれば幸と存じます。
- (注) 今後の移転のスケジュール
六月一日～二十日……改装工事
六月下旬……移転
六月末日を以て移転を完了の予定です。
(松田)
- (B)会員談話室
ジュエルの敷かれた床にソファを配し、会員の憩いの場にしたいと考えております。集会室との境の壁には、貴重な蔵書を入れる書棚を設け、又マナス山頂の石などの各種記念品を収容しておく陳列ケースも設けたいと考えています。
- (C)図書室
是非専任のライブラリアンをおき、内外の蔵書を完備し、併せて復写設備等も考えたく存じます。蔵書の収容量は現在のルームでは二五〇〇冊が限度ですが、新ルームでは前記談話室の書棚と両方を併せて約二万冊を収容できる見込みです。会員各位からの図書の寄贈を歓迎致します。

かくの如き諸事情を勘案の結果、二千余名の会員の総力を結集して本移転を実現する以外に方策はないと断じ、ここに左記の通りルーム基金の募金を計画し実施するものであります。

つきましては諸事ご多端とは存じますが本趣旨にご賛同賜わり、是非ともご応募いただきたく移転趣旨ご説明等々お願い申し上げます。

記

一、募金総額 金八百万円也

二、募金方法

(1) 一口金壹千円として一口以上、但し

東京、神奈川、千葉、埼玉の四都県在住会員は三口以上

(2) 申込方法及び期間

(A) 昭和四十二年六月末日まで

(B) 別添申込書により、本会事務所宛

(3) 払込期間及び方法

(A) 昭和四十二年七月末日まで

原則として一括払込

(以上)

ルーム基金の募金方法について

かねてより懸案であったルームの移

転もきまり、充実したクラブライフの

楽しめるルーム整備が実現に近づいて

いることは楽しくもあり、嬉しいこと

だと思ふ。しかしながら一方本会財務

の現状としては、これは資金量からし

て、会の年間予算を上回る金額では

あり、ルーム移転そのものは全く会内

部のことでもあるので、ルーム移転可

否の検討と併行して、資金捻出につ

て討議した結果、会員各位からの提出

に頼らざるを得ないということになっ

た。『鶏が先か卵が先か』という問題

に似ては来るが、つまり所二千余名の

会員一人一人が平均五千円の募金に

応じて下さるならば十二分に実行可能と

判断されるので、クラブライフの充実

記憶と想像

武田久吉

自分の目ではっきり見、耳で確かに聞いた事柄でも、月日のたつにつれて、段々臆気になるのはやむを得ない。その記憶の薄れ具合が、中々平等に行かないもので、一部は割合にはっきり覚えていて、或る部分は遙に朦朧となるとその部分の記憶を蘇らせる為には時に半ば有勝ちな想像を交えて、話の辻褄を合せて、安心感または満足感を得ることになるのだと、私などにはそう思われる。

ところで、日本山岳会六十年記念講演会で、山岳会創立前後の

部(関係なく)は三口以上その他地域は一口以上であるがこれはあくまでも原則であつて是非とも可能な限りの口数で応募をいた

きたいものである。

四、募金委員会メンバー

委員長・松方三郎

委員(〇印は常任委員、順不同)

〇石原憲治、今井雄二、今西寿雄、〇

入沢文明、小原勝郎、織内信彦、〇折

井健一、〇神谷恭、川喜田壮太郎、川

森左智子、熊谷太三郎、桑原武夫、国

分賢一、近藤茂吉、〇佐藤久一朗、

〇佐藤テ、坂倉登喜子、〇島田興、

中屋健一、〇西堀栄三郎、〇早川種三、

〇日高信六郎、〇深田久弥、植有恒、

〇三田幸夫、村井米子、望月達夫、藤

山愛一郎、増田甲子七、河合良成、藤

島敏男、田口二郎、渡辺公平、〇加藤

泰安、〇松田雄一、〇飯野亨、各地支

部長

事務局 加藤泰安、飯野亨

思出話をした折、会の創立者の一人となつた城氏が、当時は私には

内証で、高頭氏の身許調査に行つ

た事を述べたところ、私の次に演

壇に上つた模氏が、身許調査に行

つたのは、城氏ではなくて、私が

行ったのだと、私の話を打ち消し

て居られる。あの折私は私の話を

終つて直ちに退出したので、幸か

不幸か、その時模氏の講演を聞か

なかつたので、其の場で模氏の言

の誤謬を指摘出来なかつたが、模

氏は何を根拠として左様な事を言

われるのか伺い度いものである。

あいにく高頭氏も高野君も物故し

て、証人に立つて呉れる人がいな

いから、私の側は些か不利である

らしく見えるが、会の結成に當つ

た私は、模氏よりも当時の事情を

よく知っている筈である。

今一つ伺い度いのは、私が花の

写真を撮る時、風よけの為に、セ

ルロイドの屏風で花をかこつて云

々とあるが、私の持つて歩いたの

は、布製のたためる物で、セルロ

イドのは自宅でも使つたことはな

い。第一所持してないのだから

使う筈もない。模氏はどの山で

それを見られたのか、私には全然

記憶がないのである。

序に言うが、高野君が逝去され

た後、数名の人が追悼文を書いた

が、中村清太郎君の書かれたもの

の中に、大正十二年九月一日の震

災で、高野君の家が焼け、数百枚

の山岳写真の原板(ガラス)が熔

けて大きな塊となつたのを見て、

頭髮が一遍に白くなつたように記

されてある。そういうことは有り

勝ちな事だろうが、高野君の場合

には、大正七、八年頃かに脚氣を

煩い、アンティペリベリンの注射

を沢山やつた為だと本人が談つて

いた。罹病の時期や頭髮の事につ

いて、一応未亡人に問合せたが、

不明であつたので、それについて

曾て会報に筆を執つた時、もっと

適確に書くことが出来なかつたの

は遺憾である。こういう時、記憶

の良い梅沢君が生きていてくれれ

ばと、常々思うことである。

誤謬の記事が一度活字となる

と、誰しもそれを拠所とするから

記憶力の悪い私など、いつも十分

注意して、殊に筆にする場合には

は、重要な事柄は精一杯調べた上

でなければ、軽々しく書かないこ

とにしている心算であるし、わけ

でも反証を挙げるときには、確証

をつかむことに努力を惜まない。

つい先達而も、山岳協会のある

副会長から、有りもしない事柄で

問責状を貰つて驚いたことであつ

た。まさか酒の上で書いたもので

もあるまいが(昭和四十二年五月

五日)

マッターホルン北壁の

冬期登攀(一)

(I・Y)

山学同志会(小西政経、遠藤二郎、星

野隆男)12月8日。英国隊(Dougal

Hastoin, Mike Burke)12月12日。

共にその国での初登攀。第五、六登。



☆トランシーバーの使用法☆

芳野 起 夫

今回、富山県の登山条例等で、登山にトランシーバーの携行が義務づけられた。ここで言うトランシーバーは、無線従事者の国家試験を受けて資格を取らなくても、簡単な手続きだけで無線電話が使える、いわゆる市民バンド・トランシーバーのことである。これを山で取扱う場合、電波伝播等の難かしい問題もあつて、簡単に説明することは大変困難であるが、これを新たに購入される場合、またこれを有効に使用するための注意点を述べて御参考供したい。

A 購入時の注意

① 市民バンドは周波数約二七メガサイクル(波長約一一メートル)の附近に約八つの波が割り当てられている。使用周波数が異なるトランシーバー同志では通話できないので、購入に当り、どの周波数のものが登山用に好適であるかを考えておかねばならない。山岳地では尾根の向う側のような見通し外のところが多いので、電波は非常にとどき難い。それをおこなうために、なるべく大電力で送信できる方が通話の可能性が大きい。市民バンドに割り当てられた送信電力は、周波数によってその最大値が限定されており、業務用として割当てられた二六・九六八メガサイクルと二六・九七六メガサイ

クルは最大出力〇・五ワットまで、その他二七・〇四〇、二七・〇八〇、二七・一二〇メガサイクル等では最大〇・一ワットまでしか許可されていない。

そこで山で使用するためには、必ず周波数二六・九六八メガサイクルか二六・九七六メガサイクルのものを択ぶべきである。

現在発売されているこの周波数帯の機器は、業務用のため他の周波数帯の機器にくらべて高級な設計が行なわれ、構造、性能も良く、またこの二つの周波数帯をスイッチで切換えて使用できるようになっており、出力〇・五ワットのものとして、〇・一ワットの二種類の機械が幾つかのメーカーから発売されている。

見通しのきくところでは、〇・一ワットで数キロメートル、〇・五ワットで数十キロメートルの遠方と通話できる。そこでベースキャンプ等には〇・五ワットの大型を、行動用には〇・一ワットの小型のものを組合せて使用すると非常に便利である。そのような点からも、この周波数帯のものを購入することをすすめる。

② ケースは必ず金属性のものであること。

今日市販されているトランシーバーは、あまり登山用としての考慮がはらわれていない。山での器械の取り扱いには乱暴になりがちであるので、プラスチックで作られたケースのものはこわれ易い。

③ 登山中にアンテナを折ってしまふことがよくある。

そこで簡単にアンテナが取り換えられる構造のものが良い。例えばニートランシーバーFB二〇二型等が良い例である。

④ 市民バンド用で完全防水のもの

は市販されていないので、防滴型と称するものが良い。しかし防水の良いものは時としてアンテナから少量の水が

侵入したようなとき、排水できず内部にたまって、かえってトラブルを起すこともある。

⑤ 送受切換えスイッチの押しボタンは押し応えのある、大型でストロークの長いものでない、戸外で皮ミートを始めたまま操作すると共に困難である。

⑥ 受信機の感度がよく、時間とともに周波数のずれの起らないつまり感度低下のめだたないものであること。

B 取り扱い上の注意

① 市民バンドの電波の波長は約一メートルで、見通しのきくところは〇・一ワットの出力で数キロメートルの遠方と通話することができる。しかし、通話路の途中に尾根や山体が引っ掛かると、その陰になったところには電波はこれを回折してやってくる。この回折のために、電波が非常に弱くなるので、通話距離が非常に短くなり、また通話不能にもなる。このようなときには、できれば双方の見通しのきくような稜線上等に中継局を出すと、通話を伝えることができる。

② 谷底で電波を放射すると、電波は周囲の山腹に反射して上空に出る。そのため谷底同志では通話距離が短い。

③ 上記のような回折や反射のあるときは、電波は直接波と反射波同志が干渉し合つて、場所によって電界強度の強弱が生じる。このため、感度の悪い時には少なくとも前後左右、若し可能ならば上下にも、一メートル(波長)の範囲内を機器を持って移動すると感度のよい点がある。あきらめずに捜すことである。

④ 山岳地では山腹での反射、回折等の影響で、最も強い到来電波は、必ずしも相手局の方向から来るとは限らない。むしろ反対側に岩壁のある時等は、相手と反対の方向から強い電波の

来ることもあるので、電波による方向探知はできない。

⑤ 低温では電池の起電力と容量が減るので、これを温めると感度も出力もよくなる。また今日の大部分のトランジスターも低温下では、内部の電流が減少して性能が低下する。したがって

早稲田大学山岳部 エルブルース山脈登山日記 1967



二月十四日、浜野隊長、田村、大村両ゴーチ、中山ら学生十七名、計二十名はバイカル号にて横浜出発。
二月十八日、モスクワ発、列車でイランへ向う。二十一日、ソ連とイランの国境を越え、二十二日、イランの首都テヘランに到着。さっそく食料などを買付けて登山準備を完了する。
二十五日、イラン山岳会長、在留日本人に見送られてテヘランを出発。バスにてディマバントの登山根拠地レーネに向い、イラン山岳会の山小屋にはいる。
二十六日、ディマバント登山開始。ルートにする南面は強風が雪を吹飛ば

て使用前にセット全体を充分温めないと、本来の性能が発揮されない。
以上の注意は、普通のトランジスタラジオにも当てはまるもので、山で使用するラジオとしては、高周波増幅付の八石で、短波もきけるものを択ぶことをおすすめする。

してしまふのか、地肌が黒々と現われている。富士の裾野のような道を、荷物をかついだロバが行く。隊員は標高三〇〇〇メートルまでトラックに乗る。この日三四〇〇メートルの放牧地にベースキャンプを建設。二十七日は雪で行動できず休養。ディマバントは、一日にして白銀の世界と変わった。
二十八日、標高四三〇〇メートルの台地に第一キャンプを作り、中山ら四名がテントにはいった。浜野ら十六名は、それぞれ三キロほどの荷物をキャンプにあげる。酸素不足の影響が少しあらわれてきた。ベースキャンプの夕食は羊肉のスキヤキ。
三月一日、第一キャンプの中山ら四名は、頂上の稜線直下五

三〇〇メートルあたりまで登り引返す。ベースキャンプの田村ら八名は第一キャンプにはいる。浜野ら八名がこれをサポーターする。二日、中山ら四名は田村らのサポーターで南稜の五〇〇〇メートルに第二キャンプを築く。登頂態勢ができた。頂上まではあと六〇〇メートルである。浜野ら八名も第一キャンプへ上る。三日、空は晴れあがっているが、猛烈な西風に襲われる。テントが吹き飛ばされぬように懸念に押えついていた。
四日、第二キャンプの中山、辻田、高木、佐藤の四名は午前六時半、強風をついて出発。ザイルを結び、南稜か

らクロアールにルートを取り、午前十一時、イランの最高峰ディマバントの頂上に立つ。イランと日本と早稲田の旗をふり「都の西北」をうたう。頂上の火口は周囲一キロほど。遠くにカスピ海が眺められた。

この日、第二隊の田村ら八名は第二次登頂にそなえて第二キャンプに上った。日数には余裕があるので全員登頂の態勢をしたわけだ。

しかし天候は五日から悪化した。午前六時に第二キャンプを出発した第二隊は途中から引退した。その後八日まで、残る十六名は登頂を期して第二キャンプで待ち続けたが吹雪はつる一方だった。八日、撤退を決意、ひょうと雷に追いつられ、全員が一気にベイスキャンプまで下った。登った時とはまるで違って、尾根が広くなるところでは胸までの雪に埋った。

十一日、レーネからテヘランへいったん帰る。

た。ディマバントを終えて、次はテヘランの真北の山塊へ目標を転じた。ホラノ(四三三〇メートル)とコロガッキ(四〇五〇メートル)である。三月十四日、出発。バスで市街地を抜け、砂漠を横切り根拠地のラルンという部落に着いて小学校に寄宿する。

十五日、ジャズエ川に沿って谷をさかのぼり、尾根にとりついて、尾根の途中にある小さな台地(標高三〇〇〇メートル)にベイスキャンプ。

十六日、快晴、ホラノに登頂。小林岡部、本田、林田、山田の五名は午前五時半キャンプを出発、標高差一三五〇メートルのホラノを目指した。日ざしは強いが気温はマイナス八度。南面に落ちて二本の尾根のうち右側の一つを辿り、主稜線に出て午前十時半、頂上に立った。積雪期の第四登という。

浜野ら第二次登頂隊の六名はベイスキャンプ入り。

この後十七日には浜野ら六名が、十九日には田村ら九名がホラノに向い、全員登頂に成功した。

一方、ホラノへの二回目、三回目の登攀が行なわれている間、コロガ

キ(四〇五〇メートル)への攻撃も開始され、小林ら五名は十七日午前十時、処女峰コロガッキの初登頂に成功した。

テヘランで考えていた目標は以上の二つであったが、両方とも予想していたより遥かにやさしかった。小林たちの報告によると、コロガッキの先にもう一つ、もっと高いピークが見えたこと。積雪期にはまだ誰も登ったことのないサラキチョール(四二二〇メートル)で、これに登ってこうということになった。

三月十九日、田村隊がホラノに向っているとき、浜野ら十一名は二つの目的を持ってコロガッキへ向って



ディマバントBC建設への荷上げ

た。一つはコロガッキの第二登であり、もう一つはサラキチョールへ向うための前進キャンプを三六〇〇メートルのピーク付近に作るためである。十一名はコロガッキ登頂に成功し、サラキチョールを目指す中山ら四名は前進キャンプに残った。

二十一日、晴れのち曇、サラキチョール登頂。中山、本田、高木、山田の



ディマバントBC(三四〇〇E)

四名は早朝、マイナス十度の寒さをついて三六五〇メートルのキャンプを出発、コロガッキを越え、むすかしいナイフ・リッジを抜けきり、午前十時十五分、頂上に立った。

この日田村ら九名はコロガッキに登り、同峰の全員登頂を完成した。

このあと二十三日には岡部、辻田、佐藤、林田がサラキチョールへの二回目の登頂を行ない、二十四日、すべての登山活動を終了しベイスキャンプを撤収してラルンに下った。

(編者注) 隊員名は、260号参照。

日米合同アラスカ登山隊

(AJJEX)

1967, American Japanese Joint Expedition.

(注・267号参照・260号の追加)

活動区域 アラスカ、ボーナ山とその周辺。学術研究(高山医学、装備の比較、気象、水河、測量)

登山目標 ボーナ山(5005m)、無名峰(4402m)、ラッセル氷河分水嶺の南にある4115m、4054mの二峰。

隊員 宮崎辰雄(55、団長)、津田周二(隊長、62)、藤田博(副隊長、47)、藤田重夫(53)、萩原邦一(35、登攀隊長)、森川列(33)、松本武彦(31)、大野光彦(31)、中島竜(29)、窪田哲夫(29)、下山隆己(29)、大西義雄(29)、荒木杜一(28)、稲留哲也(27)、羽根田博正(27)、岡本周三(23) (以上十六名)

米軍隊 Alvin Randall (Leader, 51)、Robert Bassett (50)、Norm Benton (43)、Jack Berrin (51)、Ed. Boulton (38)、Gerry Burdette (32)、Carol Carnahan (24)、Roscoe Carnahan (27)、Claude Glenn (48)、Pete Haase (24)、Ramona Hammerly (27)、Dick Hickock (44)、Don Holliday (42)、Galen McBee (28)、Frances Randall (42、F) (以上十五名)

日程 4・5で全員離日、5月上旬ボーナ峰、四四〇二峰、その他の未踏峰、中旬、車でシアトルへ、下旬マウンテンニヤズの隊員とレニヤール登山。6・9、シヤトル発、10神戸着。総経費 八、七〇六、五七五円也

(編者注・朝日夕刊42、4、26によると、26日8am、シアトルにある神戸市事務所からの電報で、同隊が現地時間24日に、ボーナ山の主峰に登ったとのこと。次の目標は四四〇二mの無名峰で、登頂すれば、マウント・コウベと命名のはず。因みにシヤトルと神戸市は姉妹都市となっている。

イエルーバハー初登の疑問

吉沢一郎

Crowley
の二人が、
南方から主
峰に登って

昨年末、アド・カーターから一九六六年度の南北アメリカにおける登山成果が送られて来た中に、次のような記事があった。

◇
ワイワシニ山群の最高峰イエルーバハー(6534m)の第二登が久振りに行なわれた。登頂者は、ノルウェー生れのアメリカ人、Leif Norman Pattersonとポーランド生れのアルゼンチン人、Jorge Petersekの二名、ルートは西壁でした。

二人は八日分の食糧と野営用具を携えて壁に立向いましたが、頂上に達したのは一二日後の七月(注・これは六月の誤りか)一二日のことでした。下りは一九五〇年に初登をした、David Harrah と James C. Maxwell II が探ったルートでした。二人は南峰の頂上で支援隊に会いました。尚、その後、David Isles と John

います。

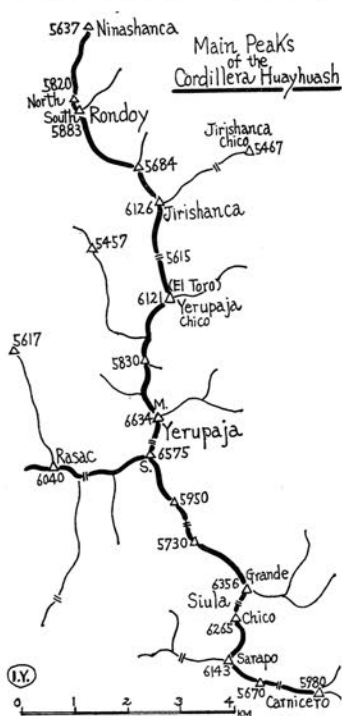
◇
昨年は日本の芝浦工大隊も南峰とのコルから七月二十四日に主峰に登っていることは已に御承知の筈である。この登攀記は近く「あかね書房」から出版されることになっている。

◇
この初登問題については、いつかちょっと何処かで触れておいたと思うが、リマ在住の宮下昭君から昨年一月二十九日付でわたしのところに左のような情報が来ている。

◇
……先日、文部省のモラレス氏の所に遊びに行きました際、例のイエルーバハー初登に関する、ハラーの書簡写しを見せて、やっぱり彼が新聞に発表した記事や、ベルビアン・タイムズの記事でカッコしてと話していました。その書簡二通同封します。興味があつたら読んでみて下さい。

イエルーバハーの西面
(オーストリー山岳会)

昨年、今年とイエルーバハー、特にその吊尾根に關し、いろいろな臆測が流れ、アルゼンチンのフォン・レーンとコメサニーなどハラーのいう通り、雪の状態が完全に変わったのだと言っておりまし



たが、スイス隊の連中は不可能と判断し、一五年前のイエルーバハー初登は考えられないといっていました。

このハーパー隊の初登は、記述の不鮮明なことも相俟って、眉唾とする人達が近年特に多くなっていたようです。

それでいざ今年、六月一二日にバタインソンとベテレックが西壁から第二登に成功してみると、これを第二登とする人、初登とする人があって、ケンケン、ゴウゴウの態でした。AAJのカーターなども眉唾組でした。詳しく話すとも長くなりますが、とに角、この件は来年のAAJに載せるそうです。……以下略す

因みに、この初登攀記は「The Butcher', The Ascent of Yerupaja, John Sack, Rinehart & Co., New York, 1952」に出ているが、英国版では「The Ascent of Yerupaja, Herbert Jenkins, London, 1954, 12/6」となっている。

◇
次にD・ハラーからAD・カーターへ宛てた、9月14日付の手紙を紹介する。

8月25日付の貴翰に対するお答えを

隊自身の行動と声明のみによって故意に行なわれているように思えること。

結局、私がPT紙の記事を誤りなく理解したとすれば、第二登隊とスイス隊は、山の下部では、われわれの隊と殆んど同じ(正確には言えないまでも)ルートを採っており、最後の岩棚から頂上へは、殆んど同じところを登っています。

更に、バタインソンは、二年前にベテレックとその仲間のウェーバーが、壁の緩い方の右側をやった時、そこは雪の状態もよく登りも楽であった。しかし今度は、無情な固い氷水が、時には雪を被っていた、われわれに足場切りを強いた。それはまるで、終りのないように思えた。(以下次号)

◇
尚、イエルーバハーという山名の意味は二様に解されている(AAJ 1966, p. 76)

一、juri(生れる) huacan(泣く) からだと、風が号泣している時に、山がその懸崖に雪崩を発生させる、というもの。

二、しかし又一方、keru(樹木)、huac(飼育用にする)と解すると、この惨めな地域では、動物が樹木さえも餌にする、となるとも言っている。

然し、前出 John Sack の本を見ると、彼が一生懸命ケチュア語の字典を調べたら、世界の頂上とか、岩の針又はその中間の意味になったという。

尚、この山のスペイン名は、Carnicero だから、それだと屠殺者となる。だが付図を見てもわかるように、同名の山は別にあるのだから、彼の研究もどうかと思う。それに私はどこで見たのか忘れたが、イエルーバハーの意味を「氷の山」と覚えていた。

春季懇親晩餐会の記

山崎 安治



故茂木猪之吉画伯筆 会員 中西豊一氏提供

会員総会に引き続いて春季懇親晩餐会が午後六時半から同所で行なわれた。会員が共にテーブルを囲み話した。この集まりは十二月の年次晩餐会のほかこの会合だけの常連は皆集れただけ、総会には出なくてもこの集まりだけは、という会員もかなりいるようだ。現に私も総会とはともかく、この会だけは遅れて行ったのだが、私の後から来た成瀬さんも、総会の会場をちよつと覗くと、いやこれはいいんだと入ってこず、ロビーで雑談をされていた。

開会に先立ってまず松方会長から、きょうは千円の会費で、ビールはコップ一杯だけとした。希望者は各自現金払いで飲みものを取って欲しいという説明があった。ACの会合での例にならったという。これは名案であった。飲んでべたはあちからでも、こちらからも手をあげ、ウェーターは大いそがしであった。私もむろん手をあげ、よい気持ちで飲んでいたら、不意に松田君に後から肩を叩かれた。この懇親会の模様を会報に書けという命令である。とたんに酔もさめはてて、あわててノートを出し途中からメモをしたら、だから初めの方は、どなたが何をしゃべられたのかあまりよくおぼえていない。

司会が深田さん。加藤泰安さんが病弱なため、こゝまた理事に引っぱり出されたという。皆さんに前むきの話しをしゃべって貰いたいとまず指命されたのが南極から帰った武藤さん。・武藤、南極は近くなった。釧路では隊員が不足して一般から募集しているほどだ。

・山口(節子) ニュージーランドは楽しかった。皆さんの御援助に感謝する。

・藤島(敏) 最近外国の山へ行く人のなかには、日本人として、初登攀などというのが多いが、これはこまる。マナスのときもそんなことはないわかった。はつきり第何登といつてほしい。勿論本会のエベレストのときにははつきり第何登といつてほしい。

・高橋(定) こんど東京支部がなくなり、山岳会もすつきりした形で山岳協会に入った。こんなことはもっと早くすべきだった。

・山本(朋) 仏の泰安に見ならって仏の朋になった。

・原(東海支部) 本部に反感を持っていたが、最近ようやくわかってきた。会員の推薦の基準を決めてほしい。又登山は単なる技術ではないので、何か一つ教程の様なものが必要である。

・中河(与) (天の夕顔の作家) かけ出しなのに何の意見もない。司会者がさつきいわれた大衆文芸論には反対

である。山も大衆化したから遭難が続出しているのだから。

・堀内(信濃支部) 年寄りへの不満が若い連中から出ている。協会問題はあまりうまく行っていない。JACとしてのこの問題についての統一見解を打出して欲しい。支部長は高山から塚本に代わった。若い連中で張り切ってやっていた。

・成瀬、英国のアルパイン・クラブは指導はやらないし、好まない。日本山岳会もクラブ・ライプを主にしてやっていた。むかしは、本場にクラブ・ライプを味方するのにはJACとゴルフ・クラブだけだったが、今やそのゴルフも大衆化した。せめて山岳会だけは本場のクラブであって欲しい。

・村木(潤) 大学山岳部の今後は重大である。主張すべきことを主張するため、全国大学山岳部としての意見を近く発表するが、学生だけは登山の政治にまきこまれぬようにしたい。

・織内(信) 昨年ACを訪れ、また以前AACを訪れたが大変クラブらしいムードが溢れていた。JACもそれに追いつけるようなムード溢れるものにしたい。ACでは各国の会章が集められていたが、その中にJACのものが見当らなかった。是非送って加えるようにして欲しい。

・深田、ベルグシュタイガー最近号によるとオーストリア山岳会では図書の充実をうたっている。戦前六万冊あった図書が戦争で全部失われたが、現在三万になったといっている。JACも図書の充実を計りたい。

・村井、中屋さんなど一生懸命作った東京支部がなくなるのは寂しい。評議員もやめさせてもらったので、今後は母心をもって自然保護の問題に専心したい。

・渡辺(公)、蔵王でスキーヤーに当

て逃げられ骨折したが、びつこにはならなかった。上高地を守るという数年前の支部長会議の決議を実行したい。最後に松方会長はJACのクラブ・ライプについて次のように強調された。何もなくてただクラブ、クラブといつても始まらない。山の仲間のとおりつくところとしてわれわれが受けついできたものを伝えていきたいと思う。これは協会のような組織ではないこと、もっと結びついた人と人とのつながりのあるところでないといけないものである。きょうここから見てみると、隣り同志に座っても知らないのではありません。こういうことがなく、皆わいわいしゃべりあえるような親しい会にしたい。クラブ・ルームからエネルギーを出したい。そのため理事のほかにクラブ・ライプを考える人が欲しい。いままで東京支部が果たしてきた役目は今後も生かしていきたい。私はいまロータリー・クラブのガバナーをやり百の支部をまわって一年の半分がつぶれてしまいが、そのポイントは仲よく親ほくを計ることだといつて歩いていく。そしてお互いの結びつきから、何か世の中のためになることがでくるものである。JACもお互いの結びつきをもっと強くし、知らない会員は一人もいないという関係を作りたい。そういうふうにお互い努力したい。

松方さんのこの話は、会の今後の在り方をよく表明されている。幸い近く新しいルームへの移転も決まり、立派な図書室も集会所もできるので、クラブとしての会の機能は大いに発揮されるに違いない。来年はさらに多くの会員がこの席に顔をそろえることを期待する次第である。

(春季懇親会出席者)
安彦六郎、今井嘉雄、飯野亨、梅野淑子、遠藤登、大貫良夫、大塚博美、岡(十七頁へ続く)

主な海外登山

一九六七年

(IV)

(11) 中央大学HK遠征隊

活動区域 コー・イ・バンド・コル
登山目標 Koh-i-Bandakor (6843
付近)

(12) 板倉勝正(隊長、文学部教授

市川邦治(27)、広田靖典(27)、
小谷恵夫(23)、磯部幸則(21)

日程 6・2 (羽田発)、4・11(カ
ブル)、14 (ハザード・セフ
エよりキャラバン)、23・7・22

(登山)、8・6・20(カブル)、
総経費 四八二万円

(12) 広島大学H遠征隊

活動区域 ムンジャン谷源頭地域
登山目標 右地域の六千米級

隊員 大谷敏夫(隊長、医学部教
授、61)、増永通男(33)、平位剛

(36)、舟橋明男(29)、石田雅則
(22)

日程 6・20 (先発)、29 (カプ
ル集結)、7・15 (ベース)、8

・15 (登山)、8・25 (カブル)
8・31 (帰国)

総経費 三三七万円

登山技術研修会

開催延期のお知らせ

本会東京支部の行事であった登山技
術研修会は六月上旬に穂高で開催する
ことになっていましたが、東京支部の
解散に伴い、都合により、十一月下旬
富士山で行なう様に変更致します。
御諒承下さい。

(指導担当理事、広谷)

学生山岳連盟結成について

日本山岳会学生部

拝啓 新緑の候、貴部に於かれましては、益々御活躍のこととお慶び申し上げます。

さて近時、登山の隆盛、発展には目覚ましいものがあり、登山というものが多くの人々の心に浸透し、楽しまれて来ましたが、最近では喜ばしい事であり、しかし反面、遭難事故の相次ぐ発生は誠に遺憾に堪えません。そして一時は大学山岳部の遭難がその大半を占めるかの如く非難された時期もあり、更に拡大して、最早我々登山者の間だけのものではなく、大きな社会問題として取り上げられるに到りました。その結果として登山禁止条例を始めとする種々の法規制、例えば登山地域別、指導制度等迄云々されるようになっております。

この様な事態に到ったことに対しましては私達も謙虚に反省せねばならないと思ひますが、ただ条例による法規制のみによつて登山が安全に行われるようになるかどうかそれらの内容、方法が果して妥当であるかどうかは更に議論のわかれるところであります。従ひまして、今後私達といたしましてはこれ等の問題は決して傍観出来ない立場にあると思ひます。もとより、こうした規制や資格制度は第三者にゆだねるべき性質のものでなく、むしろ我々が積極的に取組んでいかなければならない問題であり、自ずと学生登山者としての特質を生かす処置も考えねばならないと思ひます。従つて登山団体の全国連合体である、日本山岳協会と大学山岳部との関係につきましても大学山岳部独自の立場で参加、協力し、常に学生としての山登り、或いは学生としてのみならず真の山登り

の本質が損われることのないよう考えていかなければならないと思ひます。そこで、今迄とく個々の学校単位、あるいは特定のブロックのみで活動してきながら、全国の大学山岳部が協力して、その経験と努力を結集した新しい組織体を設置し、個々の大学が都道府県単位の組織に加盟するのではなく、全国一体となつて日本山岳協会に直結して、前記致しました諸問題、或いはスポーツ外貨の獲得といった事柄につきましても真剣に取組み、大学山岳部の進展、ひいては登山界の向上に寄与していきたいと考えております。

以上はいくまで一つの試案であり、新しい組織の名称、内容、運営方法等につきましては、今後皆様からの御批判、御意見をいただきました上で具体化して行きたいと存じます。ただ何分にも時間にゆとりがなく、はなはだ一方的な提案ではありますが素案の骨子を左記に記しましたので御検討の上、同封いたしました葉書に御意見を返送していただきたく存じます。 敬具

組織試案の骨子

目的 大学山岳部共通の問題である純粹で自由な登山の伝統を守る

第16回国際山岳探検映画祭

今年も来る9月24日から一週間、トレント市で開催される由、イタリヤ山岳会から通知があった。山岳又は探検に関する16又は35mm映画ならば、プロ、アマを問わず出品することができ各部門に多数の賞品、賞金が用意されているとのこと。作品提出は9月5日まで、資料がありますので、詳細は海外連絡担当理事までお問合せ下さい。(関周也)

こと。組織 当面事務処理の都合上全国を左記の地域制に別けて連絡の迅速化を図る。

実例

大学 北海道地域

大学 東北地域

大学 関東地域

大学 中部地域

大学 関西地域

大学 九州地域

大学 日本山岳連盟

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

大学 日本山岳協会

付記 1 登山条例との関係について 現在施行されている条例等では、未組織登山者の入山制限及び禁止を明示しているが既に各都道府県山岳協会に直接加盟している学校山岳部を除き、規則上では一応未組織登山者のグループということになる。又これ等条例が将来更に強化される話も聞かれています。

従つて今後学校山岳部の登山活動に支障を来す可能性は充分考えられるので何等かの形式で山岳協会につながる組織体として、未組織登山者と同じような扱いを受けないようにする必要があります。

2 海外登山の手続等について 現在海外遠征に出掛ける場合、スポーツ行事用外貨枠の獲得のためには、必ず日本山岳協会の加盟団体である必要がある。(従来は日本山岳協会、或いは山岳会支部推薦状があれば外貨審議会で審議され、通過すれば外貨の割当があったが、これからは非常に困難と思う。)

また、観光旅行を除き、海外登山を行う場合も、外務省経由で現地の連絡を取るような場合、山岳協会の推薦状を要求されることが予想される(現在必ず要求される地域もある。)

学生部報告

二月十五日、四十一年度後期の総会が開かれ新年度委員として帰山(芝浦工大)、三浦(中央大学)両君が夫々選出された後、新旧役員、担当理事の間で本年度の活動方針が廣々協議され、

四月二十四日、中央大学学生会館に於て、四十二年度学生部春季総会が開催された。

前委員長の佐田君(東大)より前年度の反省と本年度への希望を述べた後、新委員長帰山君より昨年度のスローガンであった学校間の親睦をより一層深く個人的なツキ合に迄推し進めたい旨の方針とスケジュール発表があった。

更に登山条例、指導員制度等に対して大学山岳部共通の問題である純粹且、自由な登山の伝統を守るため全国的組織の連盟体(仮称日本学生山岳連盟)を作つて、日本山岳協会へ直接加盟し、より積極的な学生の登山を展開すべく提案があった。尚之に就き村木氏より補足説明があり、別掲の如き文書を全国各大学山岳部に発送し、その設立に努力する事を申合された。

次いで役員の出選が行われ
委員長、帰山(芝浦工大) 学生連盟
副委員長、三浦(中大) 会計
副委員長、上杉(専修) 庶務
委員、陶山(東京理科大学) 企画
委員、桜井(農大) 記録
大滝(学習院女子) 記録

と決定した。

次回は五月十六日に第一回親睦会として神楽坂餅仲で集まる事となった。(出席者)専修大学他三校六十余名、OB村木、藤井、宮下、栗林、錦織、岡島以上6名(担当宮下記)

☆一水会懇親会

設置趣意書☆

(編者注)このお知らせは、再校が始まった時に来たので、止むを得ず隔間を縫って掲載します。

創設時の日本山岳会は、サロニアルビニズムを大切にしている山岳愛好者の個人的集合であったと思う。時代の移り(16頁へ続く)

三氏の歓迎会

ニ
イー
シャ
ー
マ
ラ
ブ
レ
ビ
ュ
フ
ァ

鉄

折りから来日中のフォスコ・マライニ(Fosco Maraini)・ケー・エフ・ブンシャー(K.F. Bunsah)・ガストン・レビュファ(Gaston Rebuffat)各氏の歓迎会を去る四月二四日、東京赤坂のOAGハウスで開催した。

マライニ氏は、親道家として知られており、各方面での業績については今更説明するまでもない。昨秋来日以来、たびたび本会の行事に出席され



て本会々員との旧誼を温められていたが、近々帰国されることになったので氏のためにはサヨナラパーティーに合ったわけである。

レビュファ氏は、トレント映画祭でグランプリを獲得した彼の傑作「天と地の間に」を上映するため去る四月一日に来日、忙がしい日程を割いて出席された。近藤等氏によれば、彼は優れた登山家であると同時に「山の詩人」でもあるという。彼の業績についても多くを語る必要はないだろう。

ブンシャー氏は三月初旬に仕事で来日、永く日本に滞在することであるが、一九五八年登頂に成功したチョー・オニ遠征隊、第一次インド・エベレスト遠征隊の副隊長として活躍したインド人登山家である。ヒマヤン・クラブの会員であるので、同クラブから三田本会副会長のものとへ送られて来た書状により氏の来日を知り、今回お招きし、歓談する機会を持つことができたのである。

前々夜、本会の総会と懇親会が同じ場所で開催され、日曜日を挟んだものの連投のパーティーであったにも拘らず、多くの会員の参集を得て、午後六時松方会長のゲスト紹介により会が開かれた。

ブンシャー氏については我々は初見であるが、氏のヒマヤンに関する広い識見は、ヒマヤンに深い関心を持つ本会々員とは話題が共通するところが多く、一々では語り尽せぬように見受けられた。マライニ氏を囲んでは賑やかな談笑が続ぎ、一方で彼の離日を惜しむ嘆きも聞かれた。また、講演会の都合で、開会後につけたレビュファ氏は「今回は二度目の来日だが、以前に較べて日本の登山は益々盛んになり登山人口も増加しているように見受けられる。この様な状況下でも日本の自然は守られており、いつまで

もそうありたい」という意味の談話があり、我々は自然保護の重要さを一層認識せざるを得なかった。

今回の会を開くに当っては、在日外国人登山家に広く開催を案内したので、多くの外国人の方々が出席された。

昨年十一月に行なった外国登山家の交歓パーティーと同様に国際色豊かなパーティーとなった。因みに、松方会長が数えたところによると、何んと十四ヶ国の人々が集まっていたこととで、これも山登りという同じ志を持つ人たちの集りにして初めて容易に思得ることである。

今回もたいへんに楽しい会であったことを報告することができて幸せであると思う。これも参会者の方々が会を盛り上げて下さったためである。

【出席者】

K.F. Bunsah, Fosco Maraini, Gaston Rebuffat, 吉沢一郎、丹部節雄、鈴木邦之、関口周也、尹宣炳、宮原義、隅部恵子、島田興、H.A. Oeler (東ドイツ文化研究所)、三田幸夫、深田久弥、三浦義明、川森左智子、藤久一朗、芳野越夫、芳野菊子、牧野文子、山崎安治、松方三郎、村井米子、R. Gowing (英国山岳会)、錦織保清、堀川英司郎、松村和幸、山本恵忠郎、渡辺兵力、山野井武夫、酒井敏明、R. F. Kan 夫妻(米国大使館)有岡達郎、B.R. Bhandary (ネパール大使館)雁部貞夫、J. Sopena (イ・V・C) D. E. Herron 夫妻 (イ・V・C) A.V. K. Murray (イ・V・C) 広羽清、沢憲夫、大塚博美、小島甫、R.L. Kinson (ニュージーランド山岳会)、中河一、武田満子、伊藤領司、木野俣U. Zambont (イタリア大使館)、T. Mudis (ベルギー大使館)、E. Linmay (ドイツ大使館)、T. Ross (フランス大使館)、F. Gasqueres (フランス大使館)、高橋

定昌、高島一芳、今井嘉道、松田雄一、浜中康栄、杉田博、網倉志朗、辰沼広吉、宮下啓三、神原達、近藤等、以上六五名。(敬称略、順不同)(関口周也)

ネパール大使の声明

誤解の修正

今は世男中の登山家が、ネパールの登山の開国を手ぐすね引いて待っているわけだが、それに比べていろいろの流言飛語が、それこそ飛んだり流れたりしている。

さる日、九州で発表されたネパール大使の明るい声明が誤解であったことは既に新聞紙上に発表されているが、ネパール大使から日本ネパール文化協会のネパール・ニュースに掲載方を請のあった、これに関する修正原文をそのまゝ、(一)「三ミスプリント」の(二)「訂正」同「ニュース第二巻」一〇号から再掲しつづねようとする。

Tokyo, March 13-(AFP)-In a press Communique to-day the Nepalese Ambassador to Japan Bhandari Raj Bhandary denied having announced that mountaineering expeditions to Nepal would be permitted again within some months or from next year.

News published to that effect in the Japanese press on the occasion of a recent visit of the Ambassador to Kyushu was a misunderstanding due to the language problem, the Ambassador explained. What he said in Kyushu in answer to various questions was that expeditions would be permitted again as soon as possible.

His Majesty's Government of Nepal has suspended the permission to mountaineering expedi-

tion for the time being. It will be opened again as soon as possible when necessary arrangements have been made to remove difficulties, the communique explained.

Those difficulties were 1) lack of sufficient number of well trained liaison officers to help and guide expeditions, and 2) lack of easy means of transportation, communication and other facilities in the mountainous region.

Nepal has sometimes felt embarrassed because, 1) some parties tried some peaks other than those permitted, when they found it difficult to climb the one for which they got permission; 2) some villages resented the expeditions in the belief that god at the top of the high mountains will be angry and bring nature havoc if people climb to the top, the communique declared.

His Majesty's Government is making necessary arrangements to avoid such unhappy recurrences and to provide necessary facilities to the expeditions in future. After the arrangements are made, permission will be available again.

When permission is given in future, all must faithfully follow the rules and regulations made by Nepal.

To a question from which date the permission will be given, I replied that it is difficult to give a definite date but it will be as soon as possible.....AFP

“生と死のあいだ”

—エヴェレストの四人—

ウッドロウ・W・セイヤー 著

山崎安治訳

一九六二年のブレモンズーンに、ヌ
プ・ラを越えてチベット領に越境し、
北面よりエベレストを試みたアメリカ
隊の Four Against Everest の邦訳
である。

この登山隊は隊長がウィルソン大統領の令孫であつたため、行方不明になつた時には、大さわざされたり、又いいきなりライフ誌に越境したショックキングな記録を発表したりした、まことに人さわがせな隊であつた。そしてその

結果が、翌年のアメリカのエベレスト隊に多大の迷惑をかける結果となったり、以後のネパール政府の登山許可に、何らかの影響を与えたことも事実で、その点ではまことに人めいわくな隊であつた。

ライフ誌に発表した記事からはこの
隊の真の意図とか、計画の発端等を知
るに不充分であったが、本書によって
その全貌が明らかにされている。

しかし、この記録を読んで感じることは、余りにも野心的であり、規則を無視したその計画からは、真のアドベンチャーの精神はみられない。登山の技術的な面でも、マッキンレーの経験

をしきりに云々しているが、実力を過信しているにすぎないことがよくわかる。

エベレストを放棄してから、帰還するまでの苦斗は並大抵のことではなかったと思われるが、われわれヒマラヤを知っている者からみれば、当然だといふことしか感じられない。

文中しきりに大遠征隊に対して、小遠征隊の意義を強調し、アドベンチャー精神をうたっているが、この点も売名的な神風登山としか受けとれない。昨年の年末には、南極の最高峰ヴィンソン峰に、ニコラス・クリンチンの率いる本格的登山隊に対抗して、セイヤウーが出かけたというニュースが伝わったが、この本を読んでいる最中だけに、又かという感じを受けた。

訳者もあとがきでふれておられるが「高さのとこ」になったセイヤー氏の気持はわからないではない。しかしそのために手段を選ばないということとは、あるいは最近の若者達には其感をもよぶかも知れないが、少なくともわたしには何の共感もよばなかった。そしてこの本を根気よく訳された山崎氏には、別の意味で敬意を表したい気持ちになった次第である。

昭和42年1月10日発行、スポーツ新書、新書版三三一頁、ベースボールマガジン社刊三九〇円 (Y・M)

中共・ネパール間道路完成

朝日夕刊42・5・18 所載ネパール通信
によると、中国のチベット国境の町ク
ダリとネパールの首都カトマンズ間の
道路が、一七日に完成した、この道路
は長さ一〇四キロ、中共が四年計画、
工費三五〇万ポンドで建設したもので
ある。(カトマンズ発ロイター)

Guido Monzino: Spedizioni D'Alpinismo in Groenlandia

ギド・モンチノ氏から標題の部厚い報告書と、同じ著者の *Spedizioni in Africa* の二冊が届く。Alpinisti in Africa の山の本は豪華である。後者は誰れかにゆずるとした。取敢えずこのグリーンランド遠征報告を紹介することにする。

イタリー山岳会は一九六〇年より五年間に亘り、夏季グリーンランドへ六隊の遠征隊を派遣した。

即ち一九六〇年より六二年にかけては東海岸の海岸沿いに、一九六〇年には北緯66度附近、一九六一年には北緯77度附近、一九六二年はウマナック周囲、と北緯77度附近に、夫々九名、九

名、九名、四名、九名の探検隊を派遣し、海岸線沿いで山登りを行っていた。更に一九六三年には一五名の隊員で東海岸の北緯72度付近にレイキャビックから飛行機で入り、Cima di Gr

anto (2,420m) を登り、一九六四年にはスタウニング・アルプスで、Dansketiinde (2,930m), Cima Ovest (2,400m), Cima Est (2,500m) に一名という強力な隊を派遣している。

障の主人は、本書の著者 C. Umberto Eco である。Monzino, Mario Fantin, Pierino Pennison, Jean Bich 等が、モーター・ヨットや動力付きのゴム・ボートを使用して、実に精力的に行動している。

本書にはこれらの記録を豊富なカラー写真、グラビア写真、地図、ルート図を収録しており、イタリー語の読めない読者にとっても、充分にその活動状況を伺い知ることができる。

巻頭にあるグリーンランド登山史も参考になるし、巻末に収録されている海

南ア・広河内岳～塩見岳の
間で行方不明となつた

遭難者捜索についてお願い

- 沖 電 氣 芝 浦 山 岳 部

[illegible]

○東京都港区芝浦四丁目一〇・一一
神電氣工業株式会社芝浦事業所
電話 〇三三四五二一四一一
神電氣芝浦山手部 日置和夫

○山梨縣南巨摩郡早川町宇奈良田
大家旅館 電話 西山 三一

行方不明者の特徴

伊藤祐司 〇三才 63.11.15 生

石田 学 ○三才集○…

身長 約一、六五メートル
 体重 約八十七ポンド
 年齢 約五十八ケラム
 主な所産物
 硝子・金出興、毛皮、鹿
 マフラー・鹿、白象牙、マ
 フター・鹿、象牙のトリ入り
 シゴ、シロ、Dカシ使用
 硝子・金出興、毛皮、鹿
 マフラー・鹿、象牙のトリ入り
 シゴ、シロ、Dカシ使用

[illegible]

二二〇三 水田健之輔

万緑や男体遠し出流山

百千鳥舞台無人や奥の院

(板木の仕流山にて)

The Alpine Journal

Vol. LXXI-November 1966-No. 313

此の号で特筆すべきことは、山崎安治氏によるModern Mountaineering in Japan であろう。日本の山の記事が、アルパイン・ジャーナルにでたのも、何ヶ年ぶりであったろうか。近年海外の山でめざましい活躍をつづけている日本の登山隊は世界中の登山家から注目されている。そしてそのトレーニング・グラウンドは一体何処なのであるか。日本には素晴らしい山があるのではないだろうかということ。が当然考えられるようになった。

こうした質問はドイツ山岳会からも聞かれたし、アメリカの各山岳会からも聞かされた。アメリカの各山岳会からも聞かされた。アメリカの各山岳会からも聞かされた。

昨年夏、アルパイン・ジャーナルのエディターA・D・M・ロックス氏が「Developments in mountain-ering in Japan」について何か執筆願う度いと本会あてに依頼があった。そこで、山崎氏にお願いして原稿をまとめてもらい、それを中屋健一氏に英訳して貰って送ったものである。

日本チームの折からこの原稿は中々タイムリーであり、中々に好評である。特に後半の日本の登山の基盤となっている宗教登山との関連については、まことに興味深いものである。

他この号にはMichael WardによるBhutan Himal, Mario FanfaniによるSome Notes on History of Aconcagua 等、興味深い記事が多々みられる。(松田)

Himalayan Mountaineering Journal Vol. 2 No. 1, July 1966

ヒマラヤン・マウンテンアング・インスティテュートの機関紙で通巻第3号である。一九六五年の七月に創刊

して以後、年二回の割で順調に刊行されており、今やインド登山界の公式リポートになった感がある。第一巻、二巻について夫々、会報二四七号、二五四号で紹介したので、この号についても簡単に紹介しておくことにする。

巻頭にある Successful Indian Climbs には、新たに一九六六年四月十八日に登頂したシッキムの Koktag (6147m) が追加されているが、これは、インドの全女性隊としての初の成功である由である。

巻頭にはこのCol. B. Jaswal が最近前任の Col. B. Jaswal から Lt. Col. N. Kunal に交替したのび、その Farewell Message が、ジャスワル大佐によりかかれている。本文の登山記録としては、エベレスト、ガネッシュ・バルバット、ガンゴトリ・峰があり、他にクマオンの概要についてのふた記事がみられる。

Dr. R.K. Gupta によるヒマラヤ植物の文献は、前号に引続き、三十三頁に亘り、約四五〇点が収録されており、この方面の研究者にとっては貴重な資料である。

他にH・M・Cの「The Indian Mountaineering Foundation」の年次報告があるが、この財団はインドの各遠征隊に対し平均五〇〇〇〇ルピー位を援助している様でうやましい。そしてこの年次報告の最後には本会婦人部への合同登山に関して次の様に記している。Indian Mountaineering Foundation negotiated a proposal to sponsor a Joint Indo-Japanese Ladies Expedition during 1966, but it had to be postponed owing to the Emergency.

なお、巻末にはインド国内の山岳会と協会のリストが掲載されているが、これによるとハイキングのクラブを含めて43団体がみられる。この数と内容

については、我が国などに比べれば問題にはならないが、この国の登山の歴史がまだ十年しかないことからみれば、急激にさかんになったことがうかがわれる。(松田)

Österreichische Alpenzeitung Folge 1351, Jan/ Feb 1967

この号には二つのヒンズークシの記録がみられる。一つはWolfgang Frey による中央アフガニスタン・ヒンズークシで、コー・イ・モンディ、コー・イ・エミ周辺に大分隊の直後に入った記録。他の一つは、チェコスロバキヤの一九六五年ヒンズークシ隊の記録で、この隊は、アフガン側からルンコーの北面に入り Hevad (6849m), James (6,210m) 等十五峰を登頂した記録で、非常に参考になる。(松田)

◇ 受入図書一覧 ◇

1966.8-1967.5

- | | | | |
|--|----------------|--------------|-----|
| ①編著者 | ②著者 | ③著者 | ④著者 |
| Spedizione d'Alpinismo in Groenland | ①Guido Monzino | ②— | ③— |
| Gentle Wilderness | ①R. Kaufman | ②G. Converse | ③— |
| I. Cento Anni del Club Alpino Italiano 1863-1963 | ①C.A.I. | ②— | ③— |
| Spedizioni d'Alpinismo in Africa | ①Guido Monzino | ②— | ③— |
| Roaming through Romania's Mountains | ①G. Epuian | ②W. Kargel | ③— |
| Bucegit-Turism. Alpinisme | ①E.M. Cristea | ②— | ③— |

- | | | | | | | | | | | |
|-------------------|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 登高者 | ①大島亮吉 | ②安川茂雄 | ③安川茂雄 | ④安川茂雄 | ⑤安川茂雄 | ⑥安川茂雄 | ⑦安川茂雄 | ⑧安川茂雄 | ⑨安川茂雄 | ⑩安川茂雄 |
| 漂流者 | ①大島亮吉 | ②安川茂雄 | ③安川茂雄 | ④安川茂雄 | ⑤安川茂雄 | ⑥安川茂雄 | ⑦安川茂雄 | ⑧安川茂雄 | ⑨安川茂雄 | ⑩安川茂雄 |
| アフガニスタンの山旅 | ①加藤泰安 | ②— | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| ユーラシア横断紀行 | ①アトキンソン | ②水口志計 | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| カラコルムを越えて | ①ヤンクハズバン | ②石一 | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| 中央アジア踏査記 | ①沢崎順之助 | ②白 | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| シルクロード探検 | ①長沢和俊 | ②白 | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| 西域への砂漠の道 | ①ラティモ | ②白 | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| 生と死のあいだ | ①山崎安治 | ②— | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| アルプス登攀記 | ①浦松佐美太郎 | ②— | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| 上 | ①浦松佐美太郎 | ②— | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| 山幾重一梅松延頼遺稿集 | ①青木重雄 | ②— | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| 世界山岳名著全集5 | ①E. ジャヴェル | ②— | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| アルプスの高嶺にて | ①尾崎喜八 | ②— | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| 鳥葬の国 | ①川喜二郎 | ②— | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| 六甲の岩場 | ①小方全弘 | ②— | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| 悲しみのケルン | ①春日俊吉 | ②— | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |
| エーデルワイス (1958-62) | ①エーデルワイス | ②— | ③— | ④— | ⑤— | ⑥— | ⑦— | ⑧— | ⑨— | ⑩— |

遭難防止条例の施行 ◇

規制地域への登山は、登山をしようとする日の十日前までに群馬県谷川岳登山指導センター所長宛に登山届を二通提出するか、若しくは同県条例の第十条適用者にあつては登山しようとする

「證明書」別表一

各加盟団体において発行し、証明書発行簿に登録の上、各所属団体の発行番号を証明書に記入する。有効期間は発行の日より一年を限度とする。

「登山計畫書」別表三

登山計画書は条例第十条第二項の定めによって、所属団体又はその代表者が検印する。

(註) 1 証明書と計画書の代表者名及び印鑑の異なるものは認められません。

(註) 2 二名以上のパーティーになる場合、証明書携帯者は一人でもよい。本会々員(含団体会員)で証明書の入要な方は、本会指導担当理事へ、お申込下されば直ちに発行致します。

代表者検印

次のとおり登山計画書を提出します。

同行者	住所	氏名	年令	職業又は勤務先

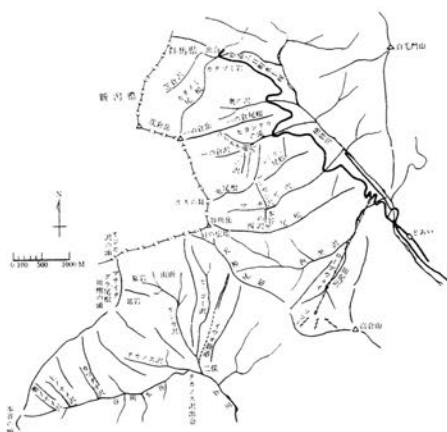
(同行者多数の場合は裏面へ記入)

東京 板橋区 赤塚 1-1-1

氏名	明大昭	年	(血液 月	型) 日生
住所	昭	年	月	日
有効期限	昭	年	月	日
発行年月日	昭	年	月	日
発行者				
住所				
山岳団体名		代表者氏名		印

登山計画書の用紙も本会事務所に常備してありますから御利用下さい。

尚本件についての御質問は、本会指導担当理事広谷にお願いします。以上



いつかの晩餐会で女給仕に遇つてカレーをぶつかかれ、憤然席を立つてしまつたタケさん、現在六七才だが、今年は西独で開かれる一〇キロの徒歩競走へ出るそうだ（朝日4255）。正確にいえば六二才以上の国際ロード・レース。ご年配で若者を尻目に活躍している人は臍曲りが多いが、タケさんもうやうらその一人。ヨットのチチエスターも多分そうだろう。（IY）

[illegible][illegible][illegible]



昭和四十二年度

通常・会員総会

▽日時 昭和四十二年四月二十二日(土) 4時
10分〜5時45分

▽場所 ドイツ東アジア研究協会講堂

▽出席者 松方会長以下九十三名、委任出席者 二四四十七名

△会議の成立

左記の次第にて出席会員数は定款第32条による法定数一二〇名を越えるから会議は有効に成立した。そこで定款第29条によって松方会長が議長となり開会を宣した。

▽議事

一、会長挨拶

かねてからよい環境のクラブ・ルームをもちたいという希望をもっていたが、このほど適当な場所が見つかり、六月末を目標に移転の準備をすすめていく。これでお茶の水時代からの懸案が、ようやく解決するわけだが、できるだけ立派なルームとするため、今後の大きな問題として、会員各位の御協力をえて募金を行ない、ルームを整備したい。

憂慮すべき問題に、相次ぐ避難に対する対策の問題がある。避難の対策は、起った事件のみをマークして、狭い角度からとりあげたのでは解決しないのではないかと、避難の問題は山へ登る人間が自然にどう対応するかという視点からとらえなおす必要がある。このような基本的な問題に踏みこんでいくことが今年度の本会の課題ではないかと思う。

二、報告事項

(1)昭和四十一年度事業報告、並びに支部報告
庶務担当理事作成の資料により報告あり、全員異議なくこれを承認した。

支部報告は出席の信濃、富山、静岡、東海、越後の各支部長(又は代理)より報告があった。これらの報告は、逐次支部総会報告として会報「山」に発表の予定につき参照された。

(2)昭和四十一年度決算報告

別表昭和四十一年度収支決算表にもとずき、各項目につき報告あり。本件につき監事野口末延氏より正確なる旨の報告あり。満場一致承認した。

三、議案

(1)昭和四十一年度事業計画

別表事業計画案につき説明あり。今年度はこの他に特別事業としてルームの移転をすすめた。これについても会員各位の絶大な援助をお願いしたい旨説明あり。本件承認した。

(2)昭和四十一年度予算案付議

別表昭和四十一年度収支予算表(案)につき飯野理事より説明あり、併せてルーム移転に伴う募金についても説明があった。

これに対し、佐藤テル氏より、新ルームは将来買収することができるものか否かと質問あり、買取ではないが、一般の契約と異なり解約のときに権利金が全額戻ることになっているので、将来山岳会所有のルームを作るまでの貯金と考えて載きたいとの説明があった。

以上の質疑応答の末、満場一致で承認可決された。

(3)諸施行規定承認の件

松田理事より昭和四十一年度中に作成され、理事会の承認をえている主事・書記等職員の職務に関する規定、ルーム使用規定、会費納入規定、支払規定、旅費規定、整備貸出規定、図書閲覧規定につき、定款第48条にもとずき承認された旨の説明あり本件承認した。

尚会費滞納者の除籍についても定款第11条により、総会の承認事項になっているが、本件については会費五年間滞納者は五年目に除籍するという内規で処理することとした。

(4)理事改選の件

昭和四十一年度の理事として定款第14条及び第20条により改選した結果、理事、評議員会で推薦した左記20名を全員異議なく、万場一致承認した。

会長 五五七 松方 三郎 再任
副会長 九二四 三田 幸夫
理事 二五七 渡辺 公平
一九五 辰沼 泰安
三五一 大塚 博美
四四〇 松田 雄一
四四〇 平山 善吉
四四六 飯野 亨
四九六 竹田 寛次
五〇四 長谷光一郎
五〇四 尾 梯 秀樹
五五〇 宮下 秀樹
一五八 深田 久弥 新任
三七七 野田 三郎
四六六 酒井 敏明
四九八 関口 周也
五五七 大貫 寛夫
五五七 中島 良夫
五八七 丹部 節雄

(5)監事一名改選の件

定款第14条の手続きにより改選の結果、牧野衛氏を推薦、万場一致承認した。

(6)評議員二名改選の件
定款第15条第20条の手続きにより、村井米子氏の任期満了に伴う欠員については川森左智子氏、深田久弥氏の理事就任に伴う残任期間(一九六七〜六八年度)については沼倉寛二郎氏を推薦、満場一致承認した。

(7)その他

東京支部解散につき質問あり、これに対し、松方会長より事情の説明があった。

昭和四十一年度収支決算表

41.4.1~42.3.31(単位円)

科 目	収 入 の 部		予算に対する決算増減(△)	科 目	支 出 の 部		予算に対する決算増減(△)
	予 算	決 算			予 算	決 算	
経 常 収 入	3,536,000	5,049,100	1,513,100	運 営 費	2,729,000	3,317,859	588,859
入 会 金	500,000	804,000	304,000	給 費	377,000	803,000	426,000
会 費	3,036,000	4,245,100	1,209,100	具 通 信	70,000	152,764	82,764
事 業 収 入	1,670,000	1,168,160	△501,840	交 通 費	150,000	167,420	17,420
広 告 料	500,000	376,240	△123,760	通 信 費	250,000	167,936	82,070
山 日 記 印 税	300,000	500,000	200,000	税 金	900,000	802,461	97,539
刊 行 物 売 上	500,000	129,620	△370,380	電 報 費	462,000	450,600	11,400
山 荘 使 用 料	370,000	162,300	△207,700	諸 税	7,000	6,500	500
雑 収 入	230,000	635,367	405,367	會 費	8,000	32,520	24,520
利 息	30,000	100,496	70,496	熱 水 費	12,000	3,000	9,000
雑 収 入	200,000	184,871	△15,129	電 話 料	50,000	42,460	7,540
山 岳 診 察 助 成 金		250,000	250,000	電 報 料	83,000	85,401	2,401
寄 附 金		100,000	100,000	交 通 費	30,000	37,324	7,324
小 計	5,436,000	6,852,627	1,416,627	交 通 費	30,000	119,186	89,186
繰 越	1,894,982	1,894,982		交 通 費	30,000	105,800	75,800
合 計	7,330,982	8,747,609	1,416,627	交 通 費	50,000	120,183	70,183
				交 通 費	50,000	60,710	10,710
				交 通 費	170,000	160,600	9,400
				事 業 費	2,690,000	1,717,358	△972,642
				會 報 費	800,000	1,010,589	210,589
				山 岳 費	1,400,000	2,000	△1,398,000
				山 岳 費	100,000	122,801	22,801
				山 岳 費	50,000	345,013	295,013
				山 岳 費	100,000	100,000	0
				山 岳 費	240,000	136,955	△103,045
				臨 時 費		52,000	52,000
				予 備 費	1,911,982	0	1,911,982
				次 年 度 繰 越		3,660,392	
				合 計	7,330,982	8,747,609	1,416,627

財産目録

昭和四十二年三月三十一日現在
(単位円)

資産総額 8,623,192

1. 基本財産 100,000

1. 運用財産 8,523,192

内訳 1. 基本財産

種類	預入先	金額
貸付信託	日本信託銀行本店	100,000

2. 運用財産

1) 現金及預貯金

種類	預入先	金額
現金		306,198
銀行預金		275,207
	第一銀行 青い山支店	690,647
	協和銀行 中目黒支店	6,674
	東京銀行 本店	248,435
	八十二銀行 松本支店	2,000,000
	協和銀行 中目黒支店	75,622
定期預金	東京銀行 貯蓄金庫	57,609
振替貯金	日本信託銀行 本店	75,622
金銭信託	日本信託銀行 本店	2,750,000
保証金	日本建設協会	6,410,392
計		6,410,392

2) 建物

用途	位置	構造	坪数	取得年月日	記帳価格
山岳研究所	長野県南木曽郡安曇村上高地林13林小班	木造22坪	昭36.5.25	1,000,000	

3) 什器・備品

種類	数量	金額
英文タイプライター	1	35,000
電卓	1	65,000
スライド機	1	30,000
椅子	1	88,000
テーブル	1	32,000
複写機	1	25,000
宛名印刷機	1	80,000
チェンソー	2	48,000
スプレー	1	22,500
宛名印刷機	1	18,000
新刊図書	1	6,300
計		449,800

4) 図書

種類	金額
洋書	373,000
和書	290,000
計	663,000

〔参考〕

未収金 726,650 (広告料 山岳61年買取 700冊
山岳61年 3,200冊
未払金 2,000,000 (但し概算
社団法人日本山岳会昭和41年度収支決算表
及び財産目録につき監査致しましたところ
其の正確なことを認承致します。
昭和42年3月31日
会計監事 野口末延
同 上 松本 熊次郎

昭和42年度収支予算表

(△印前年度増)

科目	予算	前年度予算	増減
經常収入	5,060,000	3,536,000	△1,524,000
入会金	1,500,000	500,000	△1,000,000
会費	3,560,000	3,036,000	△524,000
事業収入	2,300,000	1,670,000	△630,000
広告料	850,000	500,000	△350,000
山日刊物	500,000	300,000	△200,000
山荘使用料	700,000	500,000	△200,000
雑収入	250,000	370,000	120,000
雑収入	270,000	230,000	△40,000
利息	70,000	30,000	△40,000
雑収入	200,000	200,000	0
前年度繰越	7,630,000	5,436,000	△2,194,000
合 計	3,660,392	1,894,982	△1,765,410
合 計	11,290,392	7,330,982	△3,959,410

科目	予算	前年度予算	増減
保険料	7,000	7,000	0
経費	32,000	8,000	△24,000
諸税	10,000	12,000	△2,000
光熱費	45,000	50,000	5,000
電話料	80,000	83,000	3,000
会議費	50,000	30,000	△20,000
文書費	50,000	30,000	△20,000
備品費	50,000	30,000	△20,000
雑費	74,000	50,000	△24,000
振替料	60,000	50,000	△10,000
支部運営費	110,000	170,000	60,000
事業費	3,580,000	2,690,000	△890,000
会報出版費	1,000,000	800,000	△200,000
山岳出版費	1,800,000	1,400,000	△400,000
図書費	80,000	100,000	20,000
調査研究費	100,000	50,000	△50,000
指導費	100,000	100,000	0
名簿発行費	250,000	0	△250,000
山荘運営費	250,000	240,000	△10,000
小計	7,514,000	5,419,000	△2,095,000
予備費	3,776,392	1,911,982	△1,864,410
合 計	11,290,392	7,330,982	△3,959,410

昭和四十二年事業計画

一、主なる事業

(1) 第二十一回ウェストン祭開催
六月三十一日 於上高地(2) 登山技術研修会開催
六月下旬 於穂高(3) 有志関係会の開催
六月二十四日 於六義園心泉亭(4) 新ルームへ移転
六月下旬(5) 神内山荘の開設
六月・十月下旬(6) 富士山頂高処医学研究所開設
七月・八月(7) 支部長会議開催
七月下旬(8) 在日外国人登山家との交歓会開催
十月月中旬(9) 雪崩研究会開催
十一月月中旬(10) 年次晩餐会開催
十二月二日(11) スキー講習会開催
一月中旬

他に各支部主催による行事

二、主なる集會
小集會(報告講演会並びにシンポジウム)

(1) 会報「山」十二回 (月刊)

(2) 山岳第六十二年 (年度末)

(3) 山日誌四十三年度版(十一月月中旬)

(4) 会員名簿 (七月)

四、その他、目的を達成するために必要なる事業を各委員会が中心となつて実施する。

以上



五月理事・評議員会

△日時 五月十一日(木)六・四五(一〇・三〇)

▽場所 本会ルーム

▽出席者 松方会長、三田副会長、渡辺副会長、理事 深田、辰沼、大塚、松田、飯野、宮下、野田、丹部、広谷、長尾、平山、関口、酒井、中島、大貫、評議員 島田、藤井、吉沢、佐藤、折井、石原、沼倉、川森、監事 松本、牧野(以下委任)理事 加藤、竹田、評議員 中屋健、望月達夫、高山忠四郎、津田周二

▽議事・報告事項

(2) 本年度理事会運営方針検討の件(辰沼)

① クラブ・ライフの確立

ルームの移転に伴い、会員談話室を設け、ライフライターの充実をはかり、集會を豊富に行なうなどとして、クラブライフの確立に努力したい。

又クラブとしての支部の在り方、学生部の在り方を明確にしたい。

② 会の財政基盤の確立

ルーム移転に伴う経費は募金によりまかなうが、新ルームになれば当然経費増が考えられるので、会費徴収の徹底、新入会員の確保に努力し、会の財政面での安定を計りたい。更に来年度の課題として収益のある刊行物の刊行、神内山荘の改築等その準備に着手したい。

③ 公益法人としての本会の立場の認識とそれらを考慮した事業の実施。

ここ二・三年の間本会は、会員サービスのために力を入れ、避難対策、自然保護、海外登山、指導員、グレンジング、登山条例の問題等については、山岳協会にまかせてお示し、本会としてはきりきりした態度を示してこなかったが、社会問題として大きくクローズ・アップされてきた今日、公益法人としての本会として

大貫
〃
……山日記

⑫ 神河内山莊運営委員会

①昭和四十二年度、会費滞納による除

東京支部からの引継ぎ事項でもあ

◆

昭和41年度決算報告 (日本山岳会東京支部)

(収入の部)			(支出の部)		
前年	繰入金	64,211円	支事通資会事山	業信料議務会費	266,515
還付	収益	99,600	岳協		93,233
事業	取	124,400	支事通資会事山		0
支	取	149,600	岳協		790
雑	取	47,359	支事通資会事山		19,100
			岳協		3,000
			支事通資会事山		3,430
計		485,170			386,068
			余剰金(現金)		99,102

4月19日帳簿、領収証等、検査、結果正確デアルコトヲ認メマシタ 折井

(8頁より) 変りとともに、登山界の指導、登山組織の統制化などを手がけねばならなくなったのは致し方ないことで、この面で先導者として活躍していることは、決して悪いことではなからう。

しかし山岳人は、あくまで個人の特性を保持したままで、山を語り山を愛することによって、自分の人格を高めてゆくべきもので、組織・集団の中に個性を埋めしてしまうことは避けたいものである。日本山岳会の会員は、組織にこだわったり、その上にアグラをかくような意識を必要としない。もっとも個人の自由を大切がるはずの山岳会

(18頁へ続く)

「東京支部」
解散趣意書

終戦直後日本体育協会は全日本の登山の中心団体として日本山岳会に体協加盟を要請し、その結果日本山岳会は体協に加盟し、体協加盟の他団体にならい支部組織の方式をとり全国に地方支部を置く構想を打ち出しここで東京支部が発足致しました。

その後、昭和34年日本山岳会は全日本山岳連盟と協同し、日本山岳協会を結成し、新しく発足した日本山岳協会を通じ体協に加盟することになりました。

従って一応東京支部存立の趣旨は終った訳であります。東京地区在住者に対するクラブ・ライフによるサービスを引続いて行なっていく為、東京支部は存続して参りました。

然し今回東京支部を解散する話合いが日本山岳会並に支部役員間で一致しましたので茲に会員各位に御計い致します。

今回の措置は、日本山岳会が東京にある関係上、東京地区の場合は業務を更にスムーズに行なえる利点が生ずることを期待してのことであり、従って従来東京支部の行なっていた種々の会員に対するサービスは本部機構に吸収してそのまま継続することを明確に致します。

また群馬県谷川岳避難防止条例、富山県登山届出条例等が相次いで施行され、日本山岳協会に加盟していない未組織登山者は非常に面倒な手続を要する事となりました。処が現在日本山岳会に於ては、会員の中に地方支部に属していない者もあり、又県岳連に加盟していない支部があり、日本山岳会に属しながら、未組織登山者の扱を受けねばならない不合理が生じております。

この問題は東京都山岳連盟に加盟した。東京支部の名義を日本山岳会名に変更することによって解決するわけであり。尚今回の措置は東京支部に限りとりえられたものであることを念のため申添えます。

昭和四十二年四月一日
東京支部長 石原憲治
「東京支部」会員各位

五月海外連絡委員会

日時 五月十九日六時三〇分
場所 本会ルーム
出席者 吉沢、松田、牧野、丹部、芳野、関口

議事

(1)本年度の構成委員推薦の件
三田幸夫、近藤等、牧野文子、丹部節雄、吉沢一郎、芳野超夫、鈴木郭之、深田久弥、松田雄一、関口周也(以上再任)、日高信六郎、田村俊介、山口節子、小味秀純、平山善吉、堀川英司郎(新任)を推薦する。

(2)本年度の委員会の方針検討
各国との連絡は、よくとれていて。本会の正しい理解に大いに役立っている。今後連絡を密にしたい。

(3)来日外人登山家の歓迎対策
最近、多数の登山家が外国から訪れる。特に、パンクス少佐夫妻は、日本での登山を充分堪能して、日程を終えようとしている。その他ドイツ人・ロレンツ氏について。

その他

(1)海外宛ルーム移転通知作成の件。
(2)ブルガリア山岳協会主催の展覧会開催の件。(3)トレント国際山岳映画祭開催の件。(4)マリオ・フアンテン編マッターホルン百年記念号への芳野・渡部両氏の写真提供方依頼の件。(5)韓国ソール大学訪日登山隊招請の件。(関口周也)

☆今年のペルー・アンデス☆

リマ発共同・ロイター通信(ジャパン・タイムズ所載)が、ペルー政府文部省登山担当官、セザール・モラーレス・アルナオの情報として伝えてきたところによると今年はペルー・アンデスを目指して一カ国の登山隊が訪れる模様である。

これらの中で特筆すべきものは次の四隊である。

一、長野岳連隊(山二六〇号四頁参照)。主目標はフランカ山群の未踏峰、サンタ・クルス北峰(Santa Cruz, 5829m)。

二、N・Z隊は David Cooper に率いられて、ペルーの南東部「ポリビア国境に近き Cord. Carabaya」にある Trident Peak (3900m) を目指している。

カラバヤの最高峰は六二二mの Yanaloma となっているが、これはギリオネの高度だから少し高過ぎるかも知れない。この辺は一九五四年頃から登山隊が入り込んでいる。

三、ドイツのミンヒェンからは、Eike Kubel 隊が「アレキパ州の中にある Cord. Chila」に行く。この水河が流れ出る Apurimac 河は、アマゾン川の最も遠い源流の一つである。

四、は米伊伯の合同隊で、それぞれ国々から Herbert Adams Carter, Carlo Mauri, Domingo Giobbi などに参加し、目標は、ワラスの東、やや南二〇キロに位置する Cashan 峰(五七〇一m、主峰は五七二三m)。

尚この報告には、東京農工大学のワイワシニとビルカバンバ遠征が抜けている。(山二六一号参照) (松田)

ルーム日誌 (42・4)

4・3 (月) 常務理事会

5 (水) 東京支部委員会

6 (木) 定例理事評議員会

(金) 学生部委員会

(水) 海外連絡委員会
(水) 婦人部

(七頁四段より)

本竜行、織内信彦、神谷恭、川崎巖、川森左智子、菊池武昭、近藤恒雄、斎藤桂、島田巽、進藤波男、城谷一誠、須田紀子、田中正智、田畑真一、高橋進、高橋定昌、丹部節雄、中田勇吉、中河与一、中村謙、長尾悌夫、錦織保清、野口末延、原真、原田幹市、浜中康栄、広瀬武、広羽清、平沢亀一郎、藤島敏男、藤島玄、深田久弥、堀川英司郎、松方三郎、松田雄一、松本熊次郎、松沢憲夫、榎有恒、牧野衛、三田幸夫、三浦義明、村木潤次郎、村井米子、武藤晃、諸岡一治、山本朋三郎、山崎安治、山口節子、山崎金次郎、尹官炳、渡辺公平、渡辺誠司、青木昇、辰沼広吉、藤井運平、中屋健次、中保平山善吉、堀内章雄、隈部恵子、名見耶達男、宮下啓三、成瀬岩雄、堀田弥一、鈴木郭之。以上七二名

マッキンレー

◇ 南壁完登 ◇

6月8日午後、旭川市の北海道山岳連盟(伏見茂雄会長)に入った連絡によると、同連盟が来年の開道百年を記念して派遣したアラスカ遠征隊(佐々木孝雄隊長等八名)は5月26日、マ峰の南壁登攀に成功したという。(日経4269付)

あなたのネガから パネル張り

山岳写真を

ありし日の、苦闘と歓喜をいまここに

35mmからすばらしい迫力！

あなたのネガから、明快なコントラストと適切なトリミングで、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。ネガと返送料150円同封でご注文下されば到着後1週間前後で製作発送いたします。

代金は着品後10日以内にご送金下されば結構です。

なお代金前払いの方には送料は弊社で負担いたします。

但し、ネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちに返送申上げます。

お気軽にネガを送って下さい

白黒の部

■全紙半分	パネル張り	¥ 1,200
■全紙(新聞1ページ大)	パネル張り	¥ 1,600
■全紙2倍	パネル張り	¥ 4,000

カラーの部(ネガ、カラーに限りです)

■四切	パネル張り	¥ 1,500
■半切	パネル張り	¥ 3,000
■全紙	パネル張り	¥ 5,000

上記以外のサイズ、または同時に多数のご注文の際はご照会下されば、別にお見積申し上げます。



優れた技術とハイセンスの

カタログ進呈

本多写真

本多善博

名古屋市熱田局区内柴田西町1-16 TEL (611) 7047

(16頁より) 員が、登山人組織などに眼の色をかせ、自然を忘れ去ったような日常生活を過ごすだけに、もはや日本山岳会創設の理念も、會員を引きとめるべき魅力もまったくなくなってしまうであろう。

たとえ好まない奉仕をさせられることがあるとしても、いつまでも自然界の自由人として生きたいという希望を失わない山岳人の良識を消し去らないた

めに、組織・権限にはまったく無関係な集まりが、日本山岳会の中には当然あってもよからう。

山岳会がどれほど事業・指導などをガタガタやろうとも、純真に山を語り合えるアルビニスト・サロンを持たない日本山岳会は、會員に喜ばれない、良識・伝統を持たない集団にすぎないものであらう。

われわれは、失われようとする日本山岳会の伝統と良識とを語り継ぐという、会の一つの面のみのために、一水懇親会という名の時間をつくることにした。

山へ行かないときの山岳人がフアラリと訪れて、居あわせた同族と語りあうだけのものであり、それ以外のものではありえないものである。気が向けば、懇親山行とか、河岸をかえて酒をくみかわすなどの行動をとることは当然である。

この会には性格として、世話人も責任者も座長も一切不要であるが、先般、奥多摩数馬の宿で一夜を共にした面々が中心となり、この時間をつくろうと決めた。

一水懇親会規定

日時 毎月第1水曜日午後5時から9時の間

場所 日本山岳会ルーム

資格 会員であればよい
(暫定的世話人氏名次号掲載)

昭和四十二年六月十日発行

東京都渋谷区神宮前

三ノ三二 外苑コーポ内

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 吉沢 一郎

頒価五十円 (40)七六五七

振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂

あかね書房 ●山のPR誌「アルピニスト」創刊！ お近くの書店で無料進呈！ (本社直接は〒25お送り下さい) 東京都千代田区西神田 3-2-1

ヒマラヤ秘境探検の魅力！ ノンフィクション文学の感動！
大ヒマラヤの名著古典を網羅した豪華版！ 堂々第一回発売！

ヒマラヤ名著全集 全12巻 別巻2巻 全巻本邦初訳(完訳)

編集委員＝深田久弥・諏訪多栄蔵・吉沢一郎

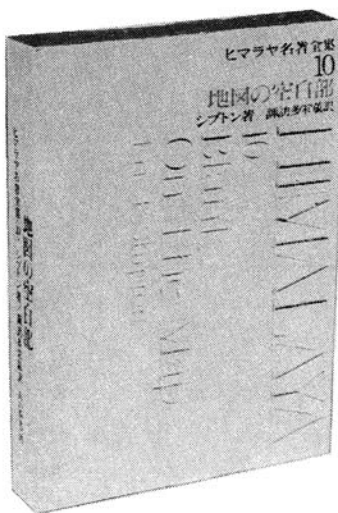
第一回配本——絶賛発売中

シプトン／諏訪多栄蔵訳

⑩ 地図の空白部

— 幻のシヤクスガム溪谷行 —
(定価——一〇〇〇円)

英国山岳会会長であるシプトンの名著！ カラコルムと中央アジア西部が接する山岳圏は「地図の空白部」として残されていた。特にシヤクスガム溪谷は、メイスン隊以来十一年余手がつかず、この行ではじめて明らかにされた。本書は小人数でシプトン流の真髓を如何なく発揮した記念的名著！ (解説・諏訪多栄蔵)



●第二回配本——8月25日

③ エヴェレストへの闘い ノートン
山崎安治訳

●第三回配本——10月上旬

⑥ 神々の御座 ハイム／ガンサー
尾崎賢治訳

カラー口絵・カラー地図入 菊判豪華装
■定価一〇〇〇円平均(各巻ごと不同)

世界山岳名著全集 全12巻・いよいよ完結！

●第12回配本／好評発売中

シプトン／吉沢一郎訳(本邦初訳) テイルマン／吉沢一郎訳(本邦初訳)

⑪ わが半生の山々／赤道の雪／白

コガン／レイナンジェ／近藤等訳ははじめ、テイラーマン、コガン／レイナンジェなど、バイオニア精神にあふれた名作を取めた待望編！

各780円

別巻——

登山百年史

アーノルド・ラン
馬場／諏訪多訳

英国山岳会の長老である著者は、世界のアルピニズムの進歩と発展にもっとも広い学識と体験をもっている。十八世紀のアルプス黎明期より岩と雪の六級登攀に至るまでの世界の山と人の歩みをまとめた力作として高く評価される一書である

判装
ス豪華